第42回日本老年医学会学術集会記録

〈若手企画シンポジウムⅡ：アルツハイマー型痴呆の克服を目指して〉

司会のことば

難波 吉雄¹⁾ 馬原 孝彦²⁾

アルツハイマー型痴呆（SDAT）研究ではめざましい成果が得られてきた。しかしながら、様々な基礎研究が進展する一方、その成果が決定的な治療法の開発には至っておらず、ある種の閉塞感が感じられていることも現状ではないだろうか。そこでここでは、既存の研究にとらわれない、新たな視点から勧められている研究の成果について発表して頂いた。

アルツハイマー病と糖エネルギー代謝に着目した研究、食行動異常と摂取栄養素、さらに様々な画像診断に関する研究などの内容が本シンポジウムで発表された。いずれの研究も現在痴呆に最も必要とされている早期診断あるいは新たな治療法開発といった方面における活用が期待される内容である。

本シンポジウムが、SDAT 克服の一助となることを期待したい。
(難波吉雄)

アルツハイマー病（AD）の研究がすすみ、AD の克服をめざす意気込みをこめて、「若手」研究者によるその治療につながる研究の一端が示された。

神戸大学の櫻井先生は、神経細胞は嫌気性解糖が障害されると、乳酸を利用した代謝で神経活動を維持するべく代謝効率に変化することを示した。ただし、シナプス可塑的現象の発現には不十分とのことであった。AD の記憶障害が糖代謝異常に起因する可能性が示唆され、糖代謝改善を標的とした治療法の研究の必要性が示された。

名古屋大学の梅垣先生により、AD の中枢でのアセチルコリン神経系の障害が、末梢カテコラミン代謝に関与する可能性が指摘された。全身病の側面についても考慮されるべきとの指摘が興味深い。

自治医大の大塚先生により、AD と食事の問題が提起された。AD 患者では、若年期より魚や野菜嫌いが多いとし、魚に多く含まれる n-3 系多価不飽和脂肪酸、ミネラル、ビタミンの摂取量が低いことを突き止められた。n-3 系多価不飽和脂肪酸であるエイコサペンタエン酸エチル投与により、短期間ながら知的機能の改善を認めたとの報告は、会場での反響も大きく、活発な論議がなされた。AD の発症予防に、食餌療法は有用と思われる。

東北大の岡村先生は、mild cognitive impairment 例で、SPECT 脳血流画像を標準化する手法により、帯状回後部の血流低下を示す群がより AD に移行しやすいことを示した。AD に移行しやすい例を選別することは、早期よりの積極的治療を行う上で重要であり、非侵襲的な画像検査がその一助となることを示した成績の意義は大きい。

本シンポジウム会場で、老年医学会員の諸先生方から頂いた、ご助言、ご鞭撻を、21世紀でのアルツハイマー病の克服にむけて活動している我々若手研究者の、今後の研究の意欲と質を高める糧としていきたい。

(馬原孝彦)

1) Yoshio Namba：東京大学大学院医学系研究科加齢医学講座

2) Takahiko Umahara：東京医科大学老年病科